

一般国道23号 中勢道路

埋蔵文化財発掘調査概報24

(平成23年度調査)

2012.11

三重県埋蔵文化財センター



相川西方遺跡全景（上空北から相川旧久居市街方向をのぞむ）



相川西方遺跡調査区（上空から第2～4次合成）

例　　言

- 1 本書は、三重県が国土交通省中部地方整備局から委託を受けた一般国道23号中勢道路建設予定地にかかる平成23年度の埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局の負担による。
- 3 調査の体制は下記のとおりである。

- ・調査主体 三重県教育委員会
- ・調査担当 三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ⅱ課

課	長	田村陽一
主	幹	竹内和昭
主	査	鈴木寛也　松葉和也　西口剛司
		星野浩行　水橋公恵
室 内 整 理 員	黒川敬子　太田浩子　森川綱代	
	北岡佳代子　山口香代　平井治代	

- ・土工作業受託機関 株式会社四門（相川西方遺跡調査）
株式会社アート
(本宮遺跡、城ノ越遺跡・東山神遺跡調査)

- 4 相川西方遺跡の調査に際しては、松田順一郎氏（史跡鴻池新田会所管理事務所）にご指導とご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。
- 5 本書作成にかかる整理及び報告文執筆は、主として各遺跡の現場担当による。
- 6 本書で用いた座標は、世界測地系による測量法の第VI座標系を基準とし、方位は座標北を示す。
- 7 本書では、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』22版（日本色研事業株式会社 1999年）を使用した。
- 8 本書に用いた遺構表示略記号は、以下の通りである。

S B : 掘立柱建物 S H : 構造住居 S K : 土坑

本文目次

I	前言	(星野)	1
II	相川西方遺跡（第4次）	(西口・星野)	7
III	本宮遺跡（第2次）	(竹内・水橋)	15
IV	城ノ越遺跡（一次）	(竹内・松葉)	20
V	東山神遺跡（一次）	(竹内・松葉)	21

挿図目次

第1図	中勢バイパス（12工区付近）遺跡位置図	2
第2図	中勢バイパス路線内遺跡位置図	3
第3図	相川西方遺跡（第4次）調査区位置図	7
第4図	相川西方遺跡（第4次）遺構平面図	8
第5図	S K 667・700・727 平面図・土層断面図	8
第6図	相川西方遺跡（第4次）出土遺物実測図1	11
第7図	相川西方遺跡（第4次）出土遺物実測図2	12
第8図	相川西方遺跡遺構配置図	13
第9図	土坑分類図	13
第10図	本宮遺跡（第2次）調査区位置図	15
第11図	本宮遺跡（第2次）調査遺構全体図	16
第12図	本宮遺跡（第2次）S H 1・S B 10 遺構図	17
第13図	本宮遺跡（第2次）出土遺物実測図	18
第14図	城ノ越遺跡（一次）調査区位置図	20
第15図	東山神遺跡（一次）調査区位置図	21

挿表目次

第1表	平成23年度中勢バイパス発掘調査遺跡一覧	2
第2表	中勢バイパス発掘調査成果一覧	4～6

I 前 言

1 中勢バイパスと埋蔵文化財保護

中勢バイパスは、三重県中勢地域の道路網を充実させるとともに、交通緩和とバイパス周辺の適切な土地利用を図り、地域の経済発展に寄与するために、一般国道23号のバイパスとして計画された鈴鹿市北玉垣町から松阪市小津町までの延長33.8kmの道路である。当事業地内における埋蔵文化財の保護取り扱いについての協議は昭和58年から行われているが、その詳細については各概報に記載されているので参照されたい。

2 平成23年度の現地調査

平成23年度の埋蔵文化財発掘調査業務の委託契約は、国土交通省中部地方整備局長と三重県知事との間で4月1日に締結した。契約期間は平成23年4月1日～平成24年3月31日である。

平成23年度の調査工程や具体的方法について、4月11日に国土交通省三重河川国道事務所と三重県埋蔵文化財センターで協議を行った。その後、同様の協議を6月、7月、9月にも行い、発掘調査業務の円滑な推進を図った。また、次年度の調査にむけて、用地取得状況や調査計画についての協議を2月に行なった。

現地調査としては、平成23年4～9月に本宮遺跡の第2次調査、平成23年5月～11月に相川西方遺跡の第4次調査、平成23年4～5月に東山神遺跡、平成23年7～8月に城ノ越遺跡の一次調査をそれぞれ行なった。

相川西方遺跡は、調査対象範囲のうち、昨年度の調査の結果をもとに、調査の条件が整った2,270m²を第4次調査の対象範囲とした。

本宮遺跡は、調査対象範囲のうち、昨年度の調査の結果をもとに、2,850m²を第2次調査の対象範囲とした。

城ノ越遺跡は、調査対象範囲11,730m²、調査面積120m²である。今回の調査では遺構・遺物は確認されず、以後の調査は不要と判断した。

東山神遺跡は、調査対象範囲11,300m²、調査面積180m²である。今回の調査では遺構・遺物は確認さ

れず、以後の調査は不要と判断した。

なお、本年度調査した相川西方遺跡、本宮遺跡、城ノ越遺跡、東山神遺跡の当事業に関わる現地調査は、本年度をもって終了した。

3 平成23年度の整理作業と報告書作成

過年度に現地調査を実施した筋迹遺跡、相川西方遺跡の遺物実測、自然科学分析、写真撮影、調査現場の図面・写真整理など、報告書作成に向け資料整理を銳意行った。

また『池新田遺跡・木造赤坂遺跡・井手ノ上遺跡』の報告書を刊行した。

4 公開普及

発掘調査に伴う公開普及活動としては、本宮遺跡の現地説明会を平成23年8月6日に実施した。当日は天候にも恵まれ、約30人の参加者があり、調査区内での見学・説明、出土遺物の展示紹介などを行った。参加者からは、多くの質問がよせられ、熱心に説明を聞いていただいた。

相川西方遺跡においては、津市教育委員会との協働による地元小学生（5・6年生）対象の現地学習を実施した。また、現地説明会を平成23年10月22日に実施し、前日の雨もあがって約25人の参加者があり、調査区内での見学・説明、出土遺物の展示紹介などを行った。

7月には、昨年度に現地調査を行った相川西方遺跡、鳥羽見城跡、上はんの木古墳、城ノ越遺跡、東山神遺跡、本宮遺跡の調査結果を記載した『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報23』を発行した。

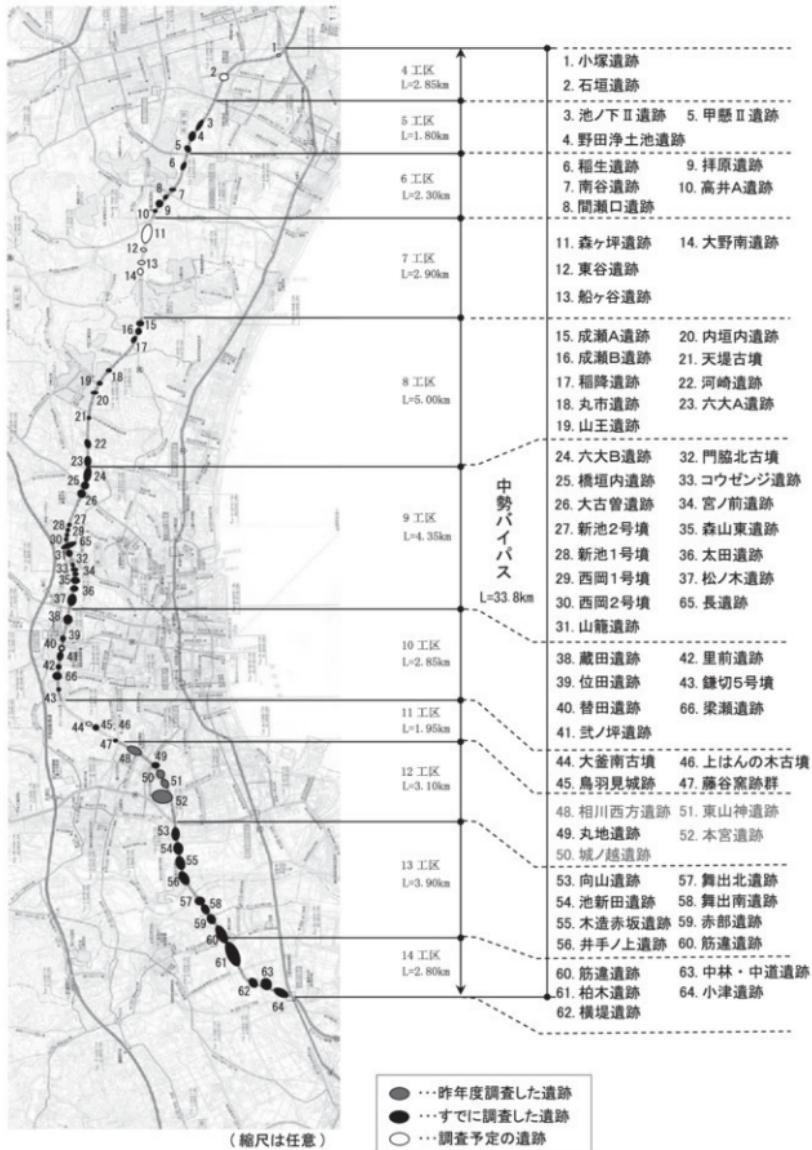
また、8月には本宮遺跡の調査成果を特集した『中勢道路調査ニュース』No.56を、10月には相川西方遺跡の調査結果をまとめた『中勢道路調査ニュース』No.57を発行し、現地説明会等で活用した。

工区	番号	遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	担当者
12	48	相川西方遺跡	津市久居相川町	2,270 m ²	平成23年5月17日 ～平成23年11月25日	西口剛司 星野浩行
	52	本宮遺跡	津市久居野村町	2,850 m ²	平成23年4月19日 ～平成23年9月30日	竹内和昭 松葉和也 水橋公恵
	50	城ノ越遺跡	津市久居小野辺町	120 m ²	平成23年7月15日 ～平成23年8月10日	竹内和昭 松葉和也
	51	東山神遺跡	津市久居小野辺町 津市久居野村町	180 m ²	平成23年4月19日 ～平成23年5月19日	竹内和昭 松葉和也
合 計				5,420 m ²		

第1表 平成23年度中勢バイパス発掘調査遺跡一覧



第1図 中勢バイパス（12工区付近）遺跡位置図（1:50,000）（国土地理院1:25,000『津西部』『津東部』）



第2図 中勢バイパス路線内遺跡位置図

区		地名	所在地	面積(m²)	測量面積(m²)	S63	H元	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23
3	池下丘陵地	鈴鹿市鈴鹿町	17,000	1,300	0																								
4	伊豆道路	鈴鹿市鈴鹿町	12,000	970	0																								
5	伊豆道路	鈴鹿市鈴鹿町	11,150	850	0																								
6	伊豆道路	鈴鹿市鈴鹿町	6,200	2,650	0																								
7	伊豆道路	鈴鹿市鈴鹿町	—	200	0																								
8	伊豆道路	鈴鹿市鈴鹿町	—	0	0																								
9	伊豆道路	鈴鹿市鈴鹿町	38,800	3,750	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
10	高井A道路	鈴鹿市鈴鹿町	3,300	350	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
11	高井B道路	鈴鹿市鈴鹿町	3,300	170	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
12	高井C道路	鈴鹿市鈴鹿町	7,000	960	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
13	高井D道路	鈴鹿市鈴鹿町	2,000	64	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
14	高井E道路	鈴鹿市鈴鹿町	3,000	96	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
15	高井F道路	鈴鹿市鈴鹿町	3,000	450	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
16	高井G道路	鈴鹿市鈴鹿町	8,700	140	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
17	高井H道路	鈴鹿市鈴鹿町	2,000	590	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
18	丸山丘陵	鈴鹿市鈴鹿町	1,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
19	丸山丘陵	鈴鹿市鈴鹿町	3,700	120	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
20	内山内道路	鈴鹿市鈴鹿町	4,200	120	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
21	入塙占領	鈴鹿市鈴鹿町	900	55	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
22	内林道路	鈴鹿市鈴鹿町	10,600	550	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
23	八人A道路	鈴鹿市鈴鹿町	15,800	448	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
24	八人B道路	鈴鹿市鈴鹿町	13,200	1,143	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
25	八人C道路	鈴鹿市鈴鹿町	13,200	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
小計			38,800	1,300	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			

第2表-1 中勢ハイバス発掘調査成果一覧

第2表-2 中勢ハイバス発掘調査成果一覧

第2義-3 申勢八才八久免抵調查成栗二覧

II 相川西方遺跡（第4次）

1 はじめに

相川西方遺跡は、三重県運転免許センターの西、津市久居相川町地内に所在する。立地は、伊勢湾へ流れ込む二級河川相川の左岸、浅い谷を中心にしてその北方が段丘に及ぶ（第3図）。

本遺跡の西600mには三重県内で最も古い5世紀後半の須恵器窯跡である久居古窯跡群が、北西800mには5世紀末の須恵器と埴輪の併焼窯である藤谷窯跡群が存在し、一帯は古墳時代中期後半から後期にかけての窯業地の觀がある。（註1）

本遺跡では、平成21年度に第2次調査、平成22年度に第3次調査が行われ、500基に及ぶ土坑が確認された。これらのほとんどは粘土採掘跡の可能性が高く、時期は弥生時代後期後半から古墳時代初頭が主体となる。（註2）

平成23年度は、第3次調査Ⅱ区の南側で2箇所、合計2,270m²を対象に第4次調査を行った。

なお、今回の第4次調査をもって中勢バイパス建設に伴う相川西方遺跡の発掘調査を終了する。

2 調査の概要

【基本層序】

調査前の現況地盤高は、第2次調査区が14.7～

16.1m、第3次調査区が13.5～14.4mと、相川の現河道に近づくにつれて低くなつており、第4次調査区では13.4～13.5mとなる。

層序の概略は次の通り。

第Ⅰ層：暗褐色土（表土）

第Ⅱ層：黄灰色～黄褐色土（灰オリーブ色土）

第Ⅲ層：黒褐色粘質土

第Ⅳ層：黒色粘質土

第Ⅴ層：褐灰色粘土（遺構検出面）～黒色粘土

第VI層：褐灰色シルト～砂礫

以上のうち、第Ⅳ層までは第2・3次調査とはほぼ同じであるが、第V層は大部分が黒色粘土層で、過去の調査で確認できた褐灰色粘土層（粘土を採掘したと考えられる層、註3）は、調査区の北西端、第3次調査区と隣接する付近に確認でき、また部分的に褐灰色シルト層が認められた。調査区南東端は、第V層は確認できず、第IV層直下は砂礫層であり、この層は、水流によってできたと考えられる。遺構は、第V層上面から掘削されている。なお、第V層は、水流が止まってできた層で、1万数千年前に形成された可能性があり、また相川西方遺跡が所在する谷全体が、水につかる条件であったと考えられる。

（註4）



第3図 相川西方遺跡（第4次）調査区位置図（1:2,000）



第4図 相川西方遺跡（第4次）調査遺構平面図（1:500）



第5図 SK667・700・727 平面図・土層断面図
(1:500)

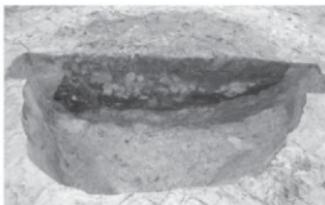
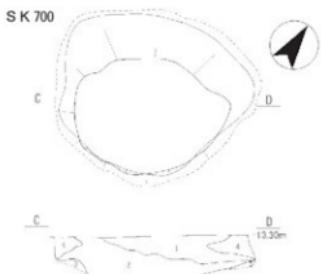


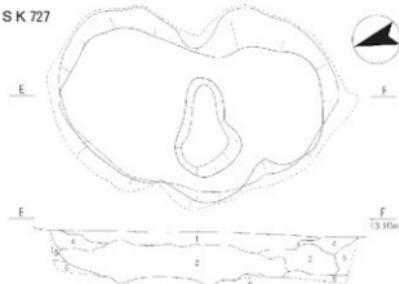
写真1 SK667土層断面



写真2 ②工区全景（北西から）



1. SY2/1黒色粘土
2. SY2/1黒色粘土に10YR5/1褐色灰色粘土。シルトのブロック混入(ラミナ形成)
3. 2.5Y5/1黄褐色粘土(地山)
4. 10Y4/1褐色灰色粘土に10YR5/6褐色土混入(地山)



1. 2. SY2/1黒色粘土
2. SY2/1黒色粘土に10YR5/1褐色灰色粘土ブロック混入(ラミナ形成)
3. 2. SY2/1黒褐色粘土
4. 10Y4/1褐色灰色粘土(地山)
5. 10YR5/1褐色灰色粘土(地山)
6. 2. SY4/1黄褐色粘土(地山)



写真3 SK 700土層断面



写真4 SK 727土層断面



写真5 ①工区遺構群（北より）



写真6 SK 638遺物6出土状況



写真8 表土掘削（遺構面が見える）

【遺構】

①工区、②工区において多数の土坑を確認した。その数は約140基にのぼる（第4図）。しかし、検出面の状況から考えると、少なくともB-Sグリッドより南東は低湿地と考えられ、SK 601～SK 639までは低湿地内の落ち込みや植物痕の可能性も考えられる。それ以外の土坑の大半は出土した遺物から弥生時代後期から古墳時代初頭もので、奈良時代の土坑は、第3次調査区との境界近くの1基のみであった。

土坑の平面形は多くが楕円形や不整円形であり、その規模は、長径約0.6～10m、深さは0.05～0.7m程度である。また、多くの土坑はラミナが見られ、オーバーハングしている。これらの傾向は第2次および第3次調査と同様の結果である。以下、個々の土坑について概略を記す。なお、遺跡名の次のカッコ付きの記号は検出したグリッドを示す。

S K 610(CC5, CD5, CE5) 長さ10.5m、幅2m、深さ0.25mの不整形土坑である。埋土は黒色粘土に灰色シルトブロックが混じる。土坑底部より背面を上に向かって木製品（12）が出土した。

S K 633(BW10-11, BX10-11) 長径2.0m、短径1.9m、深さ0.25mの楕円形土坑である。埋土は主に黒色粘土であるが、灰色粘土がまだら状に混じる。また、一部にラミナが見られ、植物痕も多く見られた。壺（10）が出土しており、この土器と約6m離れたSK 630出土の土器片が接合している。

S K 638(BS6, BT6) 長径1.9m、短径1.1m、深さ0.34mの楕円形土坑である。埋土は黒色粘土に一部褐色粘土が混じるが、遺構埋土と周囲の区別はつきにくい。遺構底部正立した状態で高杯の杯部（6）が出土した。

S K 644(BQ12) 長径1.5m、短径1.0m、深さ0.21mの不整円形土坑である。埋土は黒色粘土であり、隣接するSK 645を切っている。土師器甕の底部（13）が出土した。

S K 652(BP9) 長径1.4m、短径1.2m、深さ0.42mの楕円形土坑で、壁面はゆるやかにオーバーハングしている。埋土は主に黒色粘土層で、上層に黄灰色粘土、下層の一部に褐色粘土が混ざり、ラミナも見られる。高杯の杯部（7）、壺などが出土した。

S K 664(BO11-12) 長径2.2m、短径1.9m、深さ

0.34mの不整円形土坑であり、壁面は一部オーバーハングしている。埋土は主に黒色粘土で、一部に黄灰色シルトが混じる。土坑中央のほぼ底面より土師器甕底部（8）が出土した。

S K 667(BM, BN11) 長径1.3m、短径1.2m、深さ0.47mの楕円形土坑で、壁面は全体にオーバーハングしている。埋土は上層が黒色粘土、下層が褐色粘土に黒色粘土が粒状に混じる（第5図）。

S K 685とS K 686(BH12-13, BI12-13) S K 685は長径3.4m、短径2.7m、深さ0.58m、S K 686は2.1m×1.6m、深さ0.42mで、ともに不整形土坑である。土層断面の観察からS K 686が新しい土坑と思われる。S K 685の埋土は上層が黒色粘土層、下層が黒色粘土層に黄灰色粘土が混じる層である。一方、S K 686の埋土は黒色粘土と黄灰粘土と黒褐色粘土が混じる。

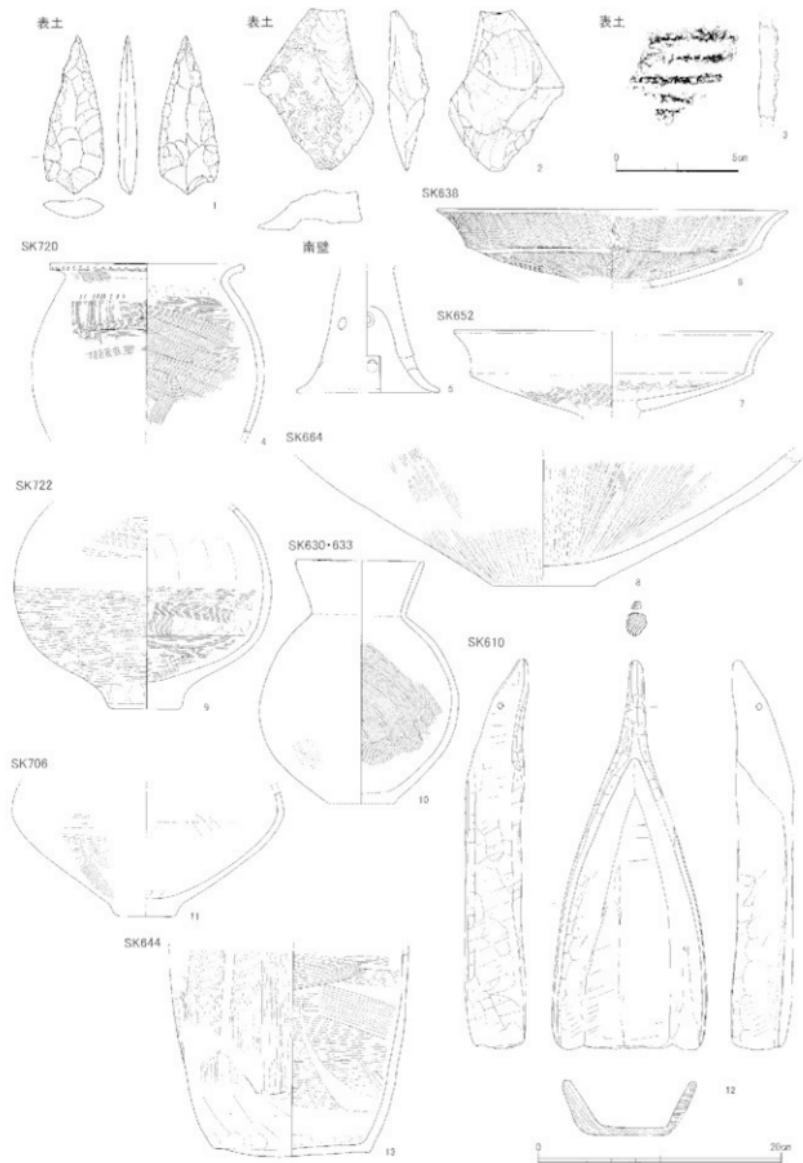
S K 700(BH10, BI10) 調査区境にある直径1.6mの円形と思われる土坑で、深さは0.35mである。壁面は一部オーバーハングしている（第5図）。

S K 708・S K 728(BI8, BI9, BJ9) S K 708は長径2.2m、短径2.1m、深さ0.53m、S K 728は長径1.6m、短径1.3m、深さ0.45mで、ともに不整円形土坑である。ともに壁面はオーバーハングが見られる。検出時には一体の土坑とみていたが、土層断面から2つの土坑と判断し、S K 728とした。なお新旧関係は断面の観察からS K 728が新しいと思われる。

S K 717(BJ8, BK8) 長径2.1m、短径1.5m、深さ約0.34mの不整円形土坑で、壁面は一部オーバーハングしている。埋土は上層が黒色粘土、下層が黒色粘土に灰色粘土が混入し、一部にラミナが見られる。

S K 720(BK9) 長径1.1m、短径1.0m、深さ0.4mの楕円形土坑で、壁面は一部オーバーハングしている。埋土は上層が黒色粘土、下層が褐色粘土である。遺構底より弥生土器甕（4）が出土した。

S K 727(BL10, BM10) 長径2.5m、短径1.5m、深さ0.43mの不整円形土坑で、壁面は全体にオーバーハングしている。埋土は上層が黒色粘土、下層は黒褐色粘土と褐色粘土が混じり、ラミナが見られる（第5図）。



第6図 相川西方遺跡（第4次）出土遺物実測図1 (1:4、1~3は1:2)

【出土遺物】

今回の調査で出土した遺物は、遺物整理箱15箱分である。時代は主に弥生時代後期から古墳時代初頭のものと、奈良時代のものに分けられる。また、縄文時代の遺物も数点出土している。

土器は全体的に風化が激しく、調整は不明瞭である。

縄文時代

1は尖頭器である。縄文時代草創期のもので、石材は下呂石である。2は削器である。縄文時代草創期のもので、石材はサスカイトである。3は縄文土器片で、貼り付けによる突帯文が見られ、外面に煤が付着している。晩期の壺型土器と思われる。なお、当遺跡で出土した縄文土器は、これが唯一である。

弥生時代～古墳時代

4は甕である。口縁下端にキザミが入れられ、頸部に刺突文が施されている。外面には煤が付着している。5は高杯の脚部で上段5方、下段4方に透孔がある。外面には煤が付着している。6、7は高杯の杯部である。6は内外面がミガキ調整され、外面に

煤が付着している。2点とも杯部のみ出土している。

8～11は壺である。8は大型壺の底部で、磨耗・剥離が激しく不明瞭であるが外面にハケ後ミガキ調整が見られる。9は外面がミガキ調整され、煤が付着している。10は磨耗のため調整は不明瞭であるが、外面底部に黒斑がある。11の底部は磨耗・剥離のため調整は不明瞭であるが、外面に黒斑がある。内面全体は黒色で、底部に工具痕が残る。

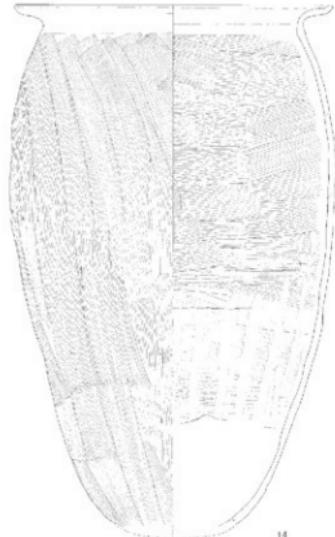
12は木製品である。縦の柾目取りで削り出して整形している。その形状から漁撈具の「アカ取り」(註5)に似ているが、詳細は不明である。

奈良時代

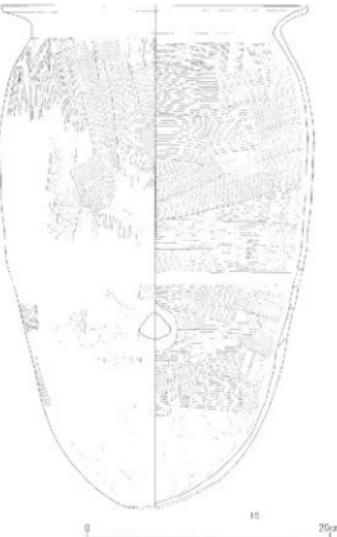
13は甕の底部である。外面は縦に、内面は横にハケ調整されている。平底であるがその形態は長胴甕に似ている。14、15は長胴甕の口縁部から体部である。外面は縦に、内面は横にハケ調整されている。2点とも底部外側が剥離している。15は、体部に外側から内側に向けての焼成後の穿孔がある。

また、これ以外に長胴甕は少なくとも4点出土している。

表土検出面



表土検出面



第7図 相川西方遺跡（第4次）出土遺物実測図2 (1:4)

3 発掘調査結果の概要

相川西方遺跡は、平成20年から23年にかけての4年間発掘調査が行われた。その概要について、現時点で確認できることをまとめてみたい。

【遺構】

相川西方遺跡の検出した遺構は、526基の土坑と4条の小溝である。土坑の平面形は楕円形や不整円形などで、規模は長径約0.5m～10m、深さ0.1m～0.8mと様々である（註6）。

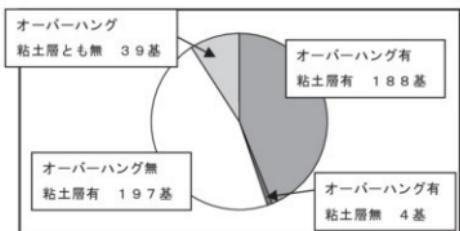
これらの土坑の大半は、粘土採掘跡であると考えられる。その根拠を次に挙げる。

遺構の検出状況から以下のことが判明した。

- ①大部分が褐灰色粘土層のある範囲に集中している（第8図）。
- ②褐灰色粘土層を横掘りしているものが多く、断面形状にオーバーハングが見られる（第5図）。
- ③褐灰色粘土層は掘り抜き、それより下層は掘っていない。
- ④遺構埋土には、採掘したと考えられる褐灰色粘土がほとんど含まれていない。
- ⑤住居跡がない。



第8図 遺構配置図 (1 : 1,400) *斜線部は褐灰色粘土層のない範囲



第9図 土坑分類図
(オーバーハングと粘土層の関係のわかる428基が対象)



写真9 割れた土器



写真10 SK610出土木製品



写真11 採取した粘土で制作、穴窯で焼成した壺

これについて補足すると、①については、第8図の斜線部分はシルト層もしくは黒色粘土層で、褐灰色粘土層ではなく、この範囲には土坑が掘られていないことがわかる。②については、粘土を採掘するために、はじめは垂直に掘り、その後土坑内の側壁にもある粘土を、出来る限り採掘したためであると考えられる。③については、粘土層より下層はシルト層や黒色粘土層などで、これらの土は必要なかったため採掘していないと考えられる。④については、採掘した粘土を別の場所に搬出した可能性を考えられる。⑤については、この場所は居住空間ではないと考えられる。

これらの土坑526基をオーバーハングと土坑側壁に見られる粘土層に着目して分類すると、第9図のグラフのようになる。この結果から、断面形状がオーバーハングしている土坑は、粘土層のある範囲に集中していることがわかる。

また、土層の観察からラミナが認められたが、これは土が時間かけて自然に堆積したこと、つまりその土坑が一定期間埋められず、開いた状態であったことを示す。このことから、これらの土坑が粘土採掘坑であったとすれば、粘土採掘後ただちに埋め戻しを行なわなかつたと考えられる。この粘土採掘後の埋め戻しの問題については、他例も含めて本報告において検討を加えたい。

また、526基のうち、奈良時代の遺物が出土した土坑は6基あるが、遺構の性格は不明である。

【遺物】

遺物は、弥生時代後半から古墳時代初頭の壺・甕・高杯が大半であるが、奈良時代の長胴甕も出土している。それ以外には、竹で精巧に編まれた籠製品、槽やアカ取りに似た形状の木製品(12・写真10)、縄文時代草創期の有茎尖頭器(1)や、削器(2)・石錐などの石器が出土している。

出土した弥生時代後半から古墳時代初頭の土器の特徴は、甕や壺は半分又は4分の1程度に割れているもののがほとんどであり、残りの部分が出土していない(写真9)。高杯は大半が杯部のみほぼ完形で出土しており、その数に比べて脚部はほんのわずかである。これらは、全てが偶然このような残り方をしたとは考えにくく、意図的に割られている可能性が

ある。残存しているその形状からも、粘土を入れるための容器等粘土採掘に関連しているものではないかと考えられる。

奈良時代の遺物は、長胴甕のみで11点あり、そのうち土坑から出土したものは5点で、残りは沼地の跡のような遺構以外の黒色粘土層(第4次調査第V層)から出土している。

【まとめ】

遺構・遺物の特徴から、相川西方遺跡は、弥生時代後半から古墳時代初頭にかけての土器の原料を採取するための粘土採掘の場所である可能性が高い。

実際に相川西方遺跡の粘土を採取し、混和材を用いずに粘土のみで土器を制作し、焼成実験を行った。その結果、野焼きの800°C前後では、特に問題もなく非常にきれいに焼くことができた。また、穴窯を使って1230°Cで焼成したところ、多少の変形は見られたが、きれいに焼くことができた(写真11・註7)。

当遺跡から出土した土器に、この粘土が使用されたかどうかは、分析の結果を待たないと現時点ではわからないが、この粘土が、土器の原料として使用できることは間違いない、この結果からも相川西方遺跡の土坑は、粘土採掘跡の可能性が高い。

【註】

1 「一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報23」 三重県埋蔵文化財センター 2011

2 註1と同じ。

3 註1文献12ページより。

4 松田順一郎氏(史跡鴻池新田会所管理事務所)のご教示による。

5 船底に溜まる水「塗(アカ)」を汲み出す道具「塗取杓(アカトリシャク)」のこと『木器集成図録近畿原始篇(解説)』奈良国立文化財研修所 1993

6 註1と同じ。

7 採取した粘土での土器制作及び穴窯での焼成は、津市在住の陶芸家清水露了氏にご協力頂いた。

III 本宮遺跡（第2次）

1 はじめに

本宮遺跡は津市久居野村町地内、相川の南側にある台地上に位置している。分布調査では縄文土器・弥生土器・山茶碗などが採集されており、縄文時代から弥生時代を中心とした遺跡と考えられてきた。

過去の発掘調査としては、昭和48年に国道165号線改良工事に伴う一次調査（その1）が行われ、少量の土師器甕や高杯・石礫が出土したが、遺構は確認されず、それ以上の調査には至っていない。

平成21・22年度に幅2mを基本としたトレンチを18箇所（A～R）設定し、一次調査（その2・その3）を行った（第10図）。その結果、O～Qトレンチで遺構を確認し、Pトレンチでは遺物も出土したため、平成23年度は、この3トレンチを含む2,850m²を対象に第2次調査を実施した。

遺跡の周辺には、古墳時代前期から古代まで断続的に集落が営まれた高茶屋大垣内遺跡（約1.2km東）

や、弥生時代後期から古墳時代中期の堅穴住居が87棟も見つかった四ツ野B遺跡（約2.0km南東）などがある。

2 調査の概要

【基本層序】

調査地は、最近まで畠地として利用されていた。現況地表面は、北から南東へ向かって低くなっている。調査区北端で標高約24m、南端で標高約20mである。調査地点における土層は、北半では耕作土直下で地山となり、南半は旧表土が何層にも重なっているが、良好な遺物包含層は存在しない。

検出面となる地山は概ね黄褐色系の粘質土であるが、場所によって異なっており、標高の高い北側ほど赤味が強く、調査区中央よりもやや南は茶褐色系、南端付近は白っぽくなる。部分的に礫を含む層もある。検出面の深さは、北半では約0.2m、南端では0.8～1.3mである。



第10図 本宮遺跡（第2次）調査区位置図 (1:2,500)

【遺構と遺物】

堅穴住居1棟・掘立柱建物4棟と土坑が多数検出され、主に堅穴住居から土師器が、表土から尖頭器が出土した。合計遺物整理箱4箱分の量である。

(1) 堅穴住居

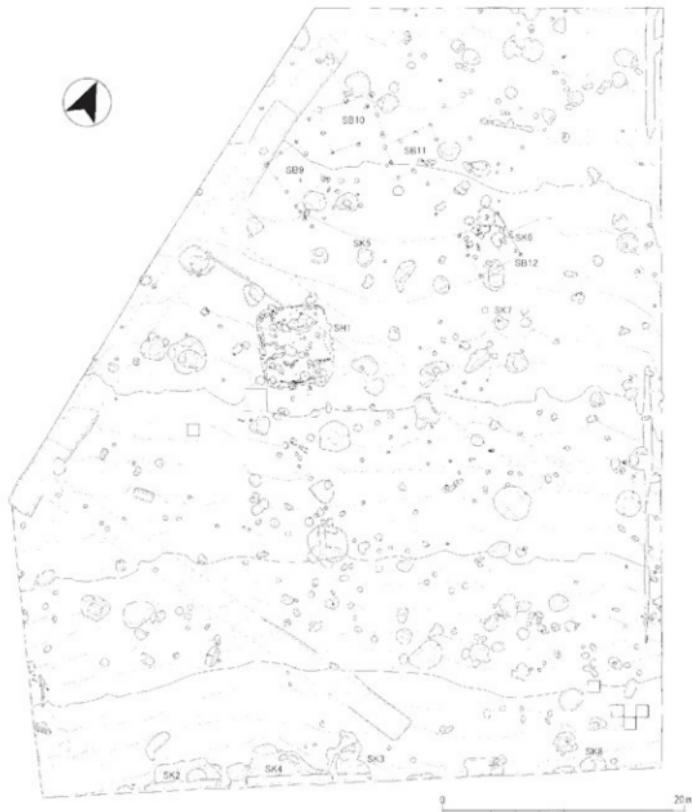
S H 1は、調査区中央やや西寄りで検出された、長辺約6.5m×短辺約5.9mの隅丸方形を呈する堅穴住居である。検出面からの深さは0.2~0.3m。壁際床面では、東壁を除く3辺で2条の壁周溝が断続的に検出され、南壁を除く3辺で壁柱穴が検出された。壁周溝は幅0.1~0.25m、深さ0.05~0.1m程度。壁柱穴は直径0.08mで、深さは0.1m以下のものが

多い。

住居内部から主柱穴4個のほか、南隅で柱穴1個と小穴1個、やや北寄りで埋土に炭・焼土が少量混じる小穴1個が検出された。炉は確認されなかった。

主柱穴は、直徑約0.5~0.7m、住居床面からの深さは約1.0mである。住居の南東隅には、貯蔵穴とみられる小穴がある。一辺約0.6mの隅丸略方形を呈し、床面からの深さは約0.4m。内部から小型の土師器壺が出土した。

S H 1は、部分的ではあるが、壁周溝や壁柱穴が二重に検出され、土層の断面観察からも切り合い関係が確認されたため、建て替えられたことが判る。



第11図 本宮遺跡（第2次）調査遺構全体図（1:400）

ただ、2条の壁周溝や壁柱穴の位置が0.2~0.3m離れているだけで、平行しており、主柱穴には新旧の切り合いが全く認められない。ほぼ同じ場所での建て替えであるが、柱を取り替えない程度の屋根や壁の改修とも考えられる。

住居埋土・主柱穴などから遺物が出土した。大半は建て替え後の住居埋土に含まれていたが、建て替え前の住居埋土（第13図6）や主柱穴（9・10）、小穴（貯藏穴：11）から出土したものも少量ある。

出土遺物はすべて土器器で、壺・高杯・甕がある。

1~4は小型丸底壺、9は小壺である。9内部の土には炭化物が混じっていた。

5・10は高杯。5は屈曲脚高杯で、10は小片のため明確ではないが、高杯の脚端部と思われる。

6~8・11は甕。6は布留式甕の影響を受けた丸底の甕。外面には煤が薄く付着していた。7・8・11はS字状口縁台付甕で、7・11は口縁部、8は台部である。

いずれも古墳時代前期のものと考えられる。

SH1



(2) 据立柱建物

調査区北部で側柱の据立柱建物が4棟検出された。互いに重複せず、堅穴住居とも切り合い関係はない。

桁行3間×梁行2間の建物が2棟（SB9・11）と、2間×2間の建物が2棟（SB10・12）ある。

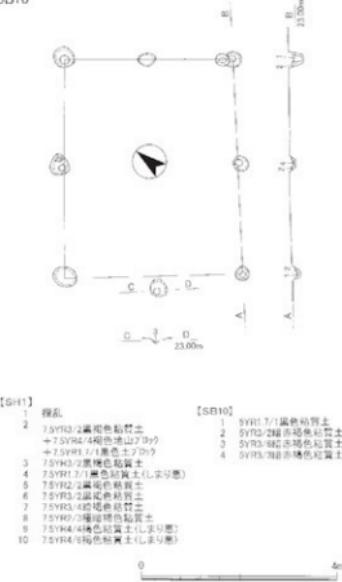
主軸方位は揃っていない。柱振形は直径0.2~0.4mの略円形を呈し、確認できた柱痕跡は直径12~15cmである。柱間はSB9が桁行方向1.5~1.6m、梁行方向1.3~1.4mで、SB10が長辺方向2.1~2.3m、短辺方向1.2~1.9mと一定でない。

いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。

(3) 土坑

調査区全面で多くの穴を検出した。中には楓倒木、抜根による搅乱の痕跡も少なからず含まれているが、調査中に遺物が出土した穴については、土坑として遺構番号を付与した。調査区南壁際で検出されたSK2~4・8は、南側が調査区外へ及んでしまい全容が不明であり、溝や谷頭などの可能性も想定できる。

SB10



【SH1】

- 1 墓室
- 2 7SYR3/2裏面赤褐色土
+7SYR6/4褐色地黄土(?)
+7SYR17/1黑色土(?)
- 3 7SYR17/2裏面赤褐色土
- 4 7SYR17/3裏面赤褐色土(しまり窓)
- 5 7SYR2/2裏面赤褐色土
- 6 7SYR3/2裏面赤褐色土
- 7 7SYR3/4前面赤褐色土
- 8 7SYR4/3前面赤褐色土(しまり窓)
- 9 7SYR4/4褐色地黄土(しまり窓)
- 10 7SYR4/5褐色地黄土(しまり窓)

【SB10】

- 1 7SYR17/1裏面赤褐色土
+7SYR2/2裏面赤褐色土
- 2 7SYR3/8C裏面赤褐色土
- 3 7SYR3/9B裏面赤褐色土

第12図 本宮遺跡（第2次）SH1・SB10遺構図（1:100）

遺物としては、土師器の高杯・壺・甕（第13図12～15）などが出土した。

（4）遺構外出土遺物

表土からサヌカイト製尖頭器（第13図16）が1点出土した。他に、チャート製剝片やサヌカイト製剝片も1点ずつ出土した。

3まとめ

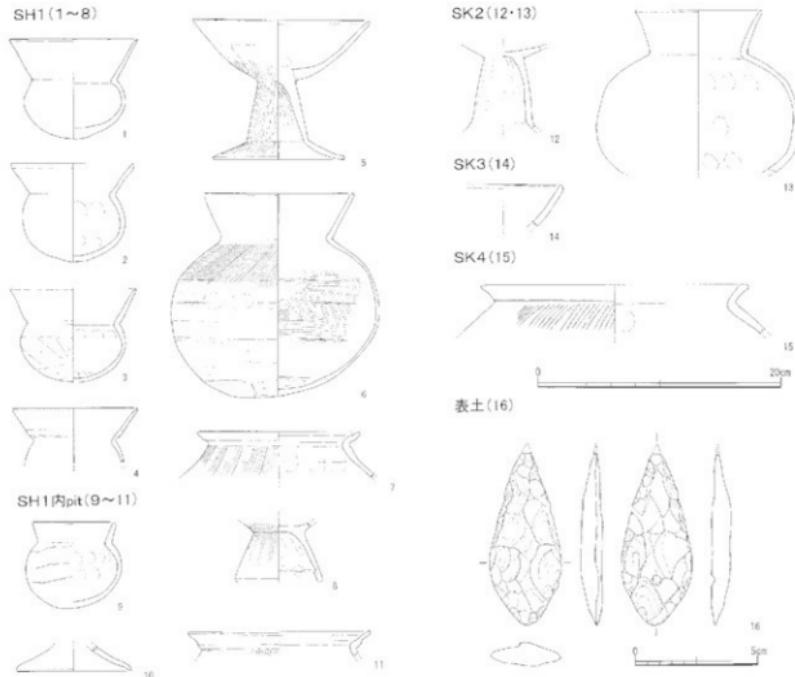
本宮遺跡では、過去に分布調査や一次調査は行われていたが、本格的な発掘調査は今回が初めてである。その結果、堅穴住居や掘立柱建物が確認され、本宮遺跡での生活痕跡が初めて明らかとなった。

縄文時代草創期のものとみられる尖頭器は、表土から出土し、同時代の遺構は見つかっていない。当時の人々はここに住んでいたのではなく、狩猟で使用されたものが、何らかの理由でこの地に残ったの

であろう。

古墳時代前期の堅穴住居は、住居埋土や壁周溝などの状況から、小規模な建て替えが行われたと考えられる。この住居の大きな特徴としては、主柱穴の深さが挙げられる。周辺で多数の同時代住居が確認された四ツ野B遺跡や高茶屋大塚内遺跡でも、主柱穴の深さが住居底面から1mに達する住居はない。また、掘立柱建物4棟は、堅穴住居との位置関係や、埋土の類似性から、堅穴住居とはほぼ同時期と考えておきたい。

今回見つかった遺構・遺物は、量的には少ないものの、住居や建物が確認された位置から、集落の東端をかすめたとも考えられる。調査区西方には古墳時代前期の集落がさらに広がっているのではないだろうか。



第13図 本宮遺跡（第2次）出土遺物実測図（1:4） 16は（1:2）



写真12 作業風景（黒い部分はSH1）



写真13 SH1遺物6出土状況（西から）



写真14 SH1全景（北から）



写真15 SH1貯蔵穴遺物9出土状況（東から）



写真16 SH1 2条の壁周溝



写真17 SB10柱穴（西から）

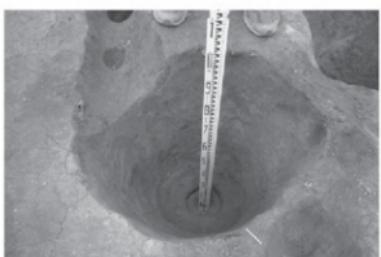


写真18 SH1主柱穴（未完掘時）



写真19 SK2全景（北西から）

IV 城ノ越遺跡（一次）

1 はじめに

当遺跡は津市久居小野辺町地内、相川の南側にある丘陵上に位置する。昭和58年度に行われた旧久居市教育委員会の分布調査では、室町時代以降の土師器・鍋等の遺物の散布が確認されており、その頃の遺跡と考えられている。現在は、畑地、果樹園、荒地などになっている。

2 調査の概要・結果

平成21年度の調査（A～D区）および、平成22年度の調査（E～Q区）に引き続き、今回は幅2mのトレンチ状の調査区を2箇所設定（R～S区）し、合計120mにわたる一次調査（その3）を行った（第14図）。

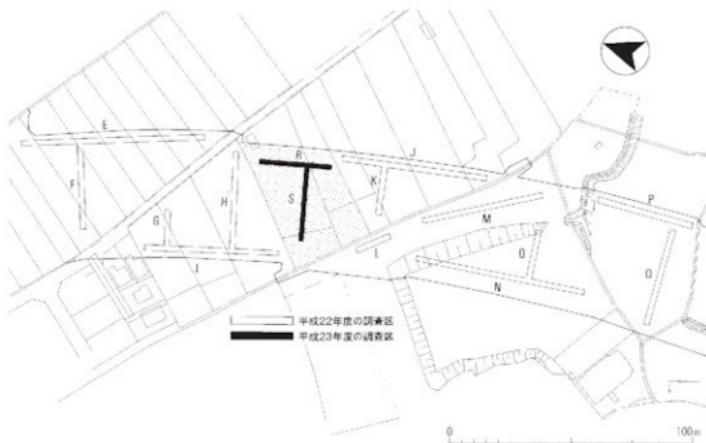
調査の結果、表土直下に褐色土層を挟み、その下に黄褐色土の地山が確認できた。現代の搅乱が多数見られたが、いずれの調査区においても遺構・遺物は確認できなかった。



写真20 R区全景（北から）



写真21 S区全景（西から）



第14図 城ノ越遺跡（一次）調査区位置図 (1:2,000)

V 東山神遺跡（一次）

1 はじめに

当遺跡は相川の南側にある丘陵上の津市久居小野辺町と久居野村町地内に位置し、分布調査において中世から江戸時代の遺物の散布が確認されている。当遺跡の北側には城ノ越遺跡が隣接しており、南側には低地を挟んで本宮遺跡がある。

2 調査の概要・結果

平成22年度の調査（A～P区）に引き続き、今回は、幅2mのトレンチ状の調査区を3箇所設定（Q～S区）し、合計180m²にわたる一次調査（その2）を行った（第15図）。

調査の結果、表土直下に褐色土または黄褐色土の地山が確認できた。現代の搅乱がいくつか見られたが、いずれの調査区においても、遺構・遺物は確認できなかった。



写真22 Q区全景（南から）



写真23 S区全景（東から）



第15図 東山神遺跡（一次）調査区位置図（1：2,500）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	いっぽんこくどうにじゅうさんごうちゅうせいどうるまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほうにじゅうよん											
書名	一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報24											
副書名												
卷次												
シリーズ名	一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報											
シリーズ番号	24											
編著者名	竹内和昭 松葉和也 西口剛司 星野浩行 水橋公恵											
編集機関	三重県埋蔵文化財センター											
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 電 0596-52-1732											
発行年月日	2012(平成24)年 11月											
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 東経 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因						
あいわせいほりせき 相川西方遺跡	みえけんつしきさいあいかわちゅう 三重県津市久居相川町	201 b180	34° 41° 21° 136° 29° 14°	2011.5.17～ 2011.11.25	第4次調査 2,270	一般国道23号 中勢道路建設						
しろのこしいせき 城ノ越遺跡	みえけんつしきさいこのんべくちょう 三重県津市久居小野辺町	201 b191	34° 40° 58° 136° 29° 39°	2011.7.15～ 2011.8.10	120	一般国道23号 中勢道路建設						
ひがしやまのみいせき 東山神遺跡	みえけんつしきさいのんべくちょう 三重県津市久居小野辺町 三重県津市久居野村町	201 b192	34° 40° 45° 136° 29° 40°	2011.4.19～ 2011.5.19	180	一般国道23号 中勢道路建設						
もとみやせいせき 本宮遺跡	みえけんつしきさいのむらちらちょう 三重県津市久居野村町	201 b202	34° 40° 27° 136° 29° 38°	2011.4.19～ 2011.9.30	第2次調査 2,850	一般国道23号 中勢道路建設						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な構造			主な遺物						
相川西方遺跡	遺物散布地	弥生時代 古墳時代 奈良時代	土坑、溝			弥生土器・土師器・石器						
城ノ越遺跡	遺物散布地	室町時代 以降	なし			なし						
東山神遺跡	遺物散布地	中世～近世	なし			なし						
本宮遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代	堅穴住居・ 掘立柱建物・土坑			土師器・石器						
要約	相川西方遺跡	津市久居相川町地内の、相川北側の段丘及び浅い谷部分に位置する。調査の結果、約140基の土坑が確認された。そのほとんどが、弥生時代後期～古墳時代初期のものである。土坑は不整形のものが多く、粘土がとれた場所に集中することなどから粘土採掘坑と考えられる。遺物は、弥生土器、古墳時代初期・奈良時代の土師器、縄文時代の石器・土器などが出土した。										
	城ノ越遺跡	津市久居小野辺町地内の相川南側の、丘陵上に位置する。調査の結果、表土直下に褐色土層を挟み、その下に地山が認められた。どの調査区からも遺物包含層・遺構・遺物は確認されなかった。										
	東山神遺跡	津市久居小野辺町・久居野村町地内の、相川南側の台地上に位置する。調査の結果、表土直下に地山が認められた。どの調査区からも遺物包含層・遺構・遺物は確認されなかった。										
	本宮遺跡	津市久居野村町地内、国道165号線北側の丘陵上斜面に位置する。調査の結果、古墳時代前期の堅穴住居、掘立柱建物・土坑が確認された。遺物としては、土師器（高杯・壺・甕）のほか、縄文時代のものと思われる石器（尖頭器）などが出土した。										

一般国道23号 中勢道路
埋蔵文化財発掘調査概報24

2012（平成24）年 11月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 光出版印刷株式会社



表紙写真：本宮遺跡第2次調査（南から）